

当世学問論

— 駒場西部劇顛末への内通傍観者の一視点 —

五十年入学 稲賀繁美

地球の裏側で「サバトの年」を楽しんでいる「闇の戦士」にまで異端審問への出席を求める回状が回ってきた、というので、なにやらドンパチの臭いがするな、と漠然と考えながらパリから駒場の東京大学につれもどされてみると、果たして派手な西部劇の真っ最中であつた。昭和の御世の最期を飾つたというべきか汚したというべきか知らぬが、とまれ「リクルート」と「御不例」が登場するまで、少なくとも夏休みまでのジャーナリズムをにぎわせていた一件をこの場で蒸し返そうというのは、ほかでもない、ようやく諸々の騒ぎも一段落（して欲しいものだ）という今日このごろになつて、平静（としかワープロは返還）でなくて変換（してくれない）平成元年四月の東京大学教養学部『学部報』に載せるべき「教官アンケート」に「あなたにとって教養とは」と称する、深く考へては自分の首を締めることに成り兼ねぬ、物騒な質問が突き付けられていたからである。小生考えるに、世に言うリクルート問題も天皇制にまつわるいざごども、この駒場西部劇も、同じ一つの「構造」（といった時代遅れの言葉をわざと使つてみよう、なぜならここで論ぜらるべき「問題」そのものが

「構造」の時代にこそふさわしい、と見える時代遅れの代物だから）から派生したものとおぼしく、ここいらで「当代」東大合気道部」及び「赤門合気倶楽部」を「駒場西部劇」の二の舞にせぬためにも、東大駒場に出来た内部分裂の顛末を、ヤボを承知で今一度「総括」しておく頃合いではないかと愚考する。

*

『朝日ジャーナル』誌上における、駒場西部劇の打ち止めとなった記事は周知のように、昭和六三年七月一日付けの小出昭一郎名誉教授の一文であり、小生が無作為に何人か大学内外の方々の意見を徴して見た限りでは、これが最も公平にして委曲を尽くした正論ないし審判と見なされている様子である。小生はいえ、小出先生が、自ら「異常」、「驚くべき」数とされる。N氏拒否の投票数について、いささか自然科学者の側の心情を代弁されつつなされた理由付けに接して、はじめて小生自身の「良識」がいかにひとりよがりで身勝手なものではなく、またそれが、どれほど自然科学者の考えと隔たったものであるかを、改めて遅まきながら悟らされ、呆然として、自らの不明を恥じた者である。察するに駒場の外国語、人文、社会、自然のそれぞれの学問に従事する教官は、ほとんどお互いに言葉が、それも専門用語のみならず、日常言語においても、こと学問論に関してはまったく意思疎通不可能な状態のままで、共存ないし棲み分けを演じてきたことが、今回の事件をきっかけにして、はしなくも明るみにでたからであ

る。互いに議論ができるならともかく、全く議論にも「闘争」にもならぬところが、事態の深刻さを印象付ける。

駒場が「腐敗」しているか否かは、この際さしたる問題ではないし、それは三面記事的興味に任せておけばよからう。たしかに駒場は知の共同体ではざりえず、またそれがもとより知の全体主義の危険を宿す以上、駒場は知の共同体であつてはならぬのを、まず確認しよう。だがこのことは裏返して見れば、それぞれのディシプリン共同体の確立にともなつて、自己の使用言語に透明性が獲得されるにつれ、その外部のディシプリンでの使用言語が相対的に不透明となつて行くほかないという必然をも合意している。つまりおのおののディシプリンは、外部に対して過剰な差異を作り出してゆくほかないのだが、まさにその代償として、そのディシプリンの内部では、自己の外部に徐々に拡がってゆく差異は隠蔽される結果となり、かくして、自己のつくりだす差異を自己に對して隠蔽することが、その分野における科学的探求の真理そのものの定義と等値になる。さて、こうして真理とは差異の隠蔽であると知つたうえで、なおかつその真理を追うのが「健全」であると見做すのは、他という差異を否認する、不寛容な価値観というほかないが、となると、今駒場に求められているのは、そうした不寛容に對する寛容さを求めるといふ態度であると結論する他ない。が、これは理論的に言つて、ひとつのアポリアである。真理の探求とコミュニケーションの努力とが、このように論理的に背馳する以上、

駒場に於ける諸ディシプリンの共存は、真理の追究とは結局両立不可能である。となると、これはいささか暗澹たらざるを得ない。言うまでもなく、不寛容にたいして寛容であれば、それは不寛容を容認することとなるし、逆にそれに不寛容であれば、そのまま不寛容を自認する結果となるからであって、行き着くところは、いずれも自己否定なのである。

換言すれば、理想をいま駒場に求めることは、駒場を解体すること以外のなものも意味しえない。さもなければ、現状はいわば、三すくみの状態という他ない。自然科学者は、実証ないし反証可能性を基準とする学問の高次の純粹性を頼みとして社会科学の低次性に同情を示し、他方、人文学者の読んでも全く分からない文章に腹を立て、バカよばかりされていらだったあまりそれに悪文のレッテルを貼って、学問の世界から放逐する。社会学者は、その科学性において自然科学に匹敵できぬ劣性の埋め合わせとして、人文学者を文人呼ばわりして、非専門家と位置付けることにより、自らの科学性の優位を確保する。人文学者は教養主義者ないし外国語教師として、社会学者から二流専門家扱いされ、所詮脱落者ゆえに評論家を気取るのだと揶揄されるの腹いせに、レトリックや言葉の遊戲で人を煙に巻き、価値の多様性やら、知の脱領域性の必要を説き、そこにある共約不可能性を理解しない自然科学者を馬鹿呼ばわりする。これは明らかに極端な戯画であるが、充当した形容詞は総て今回の一連の発言から引用したもので

ばかりである。大学の先生がこと自分の専門となるといかに偏狭な自己利益の代弁者となるか、愕然とするが、これいささかも人ごとではない。

今すこし考えをすすめれば、自然科学者は自己のディシプリンの確立において、学際の可能性を否定しておきながら、他方、外部の学問が意味不明であることに耐えられず、コミュニケーションの必要を説くけれども、この議論は、自己の奉ずる「真理」を核とした自己正当化の循環論法に陥りかねないし、それとは倒立したほとんど戯画的な情況は、社会科学系がクロス・オーバーを説きながら、まさにそのために隣接領域を締め出して、閉鎖的集団を構成してしまったという皮肉な経緯に、はしくも露呈している。また人文学が看板とする、お互いのディシプリンの共約不可能性に理解を示す寛容さは、共約可能性の貫徹に学の根拠を据える、不寛容なディシプリンにとっては、かえって自己の存在の根拠を否定しかねぬ、不寛容な態度として把握されてしまう。この逆転、この悪循環ゆえに、共通の議論の土俵を設定することそのものが不可能になるわけであるし、また件の「寛容さ」には、こうした「共通の土俵」の設定可能性そのものに、一種の普遍主義への危険を臭ぎつけて懷疑的にならざるを得ぬという、厄介な事情があつて、「不寛容」な土俵へは昇れないという「不寛容」さを体现せざるを得ぬディレンマに落ち込む。自然、社会、人文という三分野に限って鳥瞰しただけでも、このように各々のディ

シプリンが他の否定を契機として成立しているのだから、この三つ巴の相互依存ないし相互反発には、安定した静止平衡状態は有り得ない。

これは一面で「常に揺れ動くダイナミックス」としての長所を持つものではあるが、逆にその不安定さに起因する閉塞情況の端的に現れるのが、たとえば学問業績の認定である。小出氏の文章に「輝かしい学問的業績」といった言葉が臆面もなく登場しているのを、例えば村上陽一郎氏の「業績という厭な言葉」といった生理的反応と比べただけで、事の次第もおおよそつかめようというものだ。レフェリーのいない雑誌に乗った論文など業績とは言えないという、自然科学者の意見は、ほぼ「業績」という言葉の定義に等しいとみて良からうが、そのような共同体的営為への参画を潔しとせぬ態度の強度と、学問性の強度とが反比例するのが、自然科学の世界であるならば、両者の相関が比例するとはいえぬまでも、一律には決定出来ない状態をこそ健全と認識するのが、人文学の領域かもしれない。いきおいそうした諸領域での学問成果を評定する共通の尺度など存在しないことになるが、敢えて外国語教師の——測定可能な——外国語能力を、学的能力の判定基準に当てはめれば、通訳養成学校的な発想が支配的になるのは、成り行き上当然であって、ここに俄然、社会科学系統の学者から、効率主義的ないし経営者の発想の評定が介入することとなる。所詮「娯楽」を事とする人文学者が、世界的に認められる「論文」を

何本生産したところで、それは「小説」とたいして変わらない「意味のない言葉の遊戯」に過ぎまいし、遊戯に奉仕する言語使用など、コミュニケーション至上主義者たる社会学者たちの目から見ても、もとより落第でしかないことは、想像に難くない。

この攻撃に対する対抗手段として人文学者が切り出すのが、反効率主義的な教養観である。自然科学者の求める共通言語ないし、社会学者が開発する外交交渉ないし実務交渉における取り決めとしての流通言語が、ひたすら媒体の透明性に目標を定めるのに対して、「文人」側は反対に、交換の円滑さを追及したのでは除外され、等閑に付されてしまう残滓の落ち葉拾いにこそ学問の奥義ありとする。翻訳可能性よりもむしろ翻訳不可能なところに注目するという、もとより進歩と事業の観点からみれば倒錯と名付けられるほかないこの役たたずの営みは、実世界に放ってしまつては死滅するのほかなからうからこそ、学問として大学の内部で保護する必要があるというわけだ。「国語」による言語統一と支配拡大といった言語帝国主義、知的選良による知的選良の拡大再生産を図るという差別思想とは逆に、悪文しか書けない愚昧の徒を飼ひ殺しにする余裕をもってこそ、文化はその真の豊かさを開示するとは言えまいか。ことここに至れば、教養なるものの再定義が問題とならう。

＊

教養なる言葉について、今回の論争を通じて最も体系的な省察

を展開したのは、村上泰亮元教授の「大学という神聖喜劇」（『中央公論』昭和六三年七月号）であろう。その綿密な分析を単純化することをお許し戴けるならば、まずヨーロッパ型大学での自由七科という人文学を中核とするエリート養成の教養理念、アメリカ合衆国型大学における一般教育に重点を置く、専門個別科学の基礎としての教養理念、さらに日本の旧帝大における、法学部を中心に据える官吏養成学校的な発想による実学的教養理念の三区画があり、ついで、日本における歴史の変遷をいまずこし詳細に見れば、明治の官吏養成学校的、専門エリート実学教養のうえに、大正の疑似ヨーロッパ式教養主義の、精神主義Ⅱ反専門ディレックタント傾向が重ね合わされ、ついで戦後のアメリカ式教育理念の導入と大学の大衆化に伴う、専門テクノクライト養成の前提としての一般基礎教育制度の発展が見られ、そもそも原理的に必ずしも互いに両立しないこれらの理念のうちいずれかが、時と場合に依じて強調され、決定的な対決を経ないまま、曖昧な共存を保って現在に至っている、といった見取り図になる。

大筋として容認されるこの図式ではあるが、ただ一点、大正教養主義的傾向の存続に対する著者の価値判断は、今一つ明確さに欠ける恨みなしとなかった、というのが、小生の接した限りでの「語学担当の教官」たちの反応であった。著者によれば、駒場をはじめとする教養過程の「語学担当の教官」の「大部分は専門主義集団ではなく、一種の遊民であり文人である」との規定（七

七頁）がされている。「文人」を気取り、「遊民」を誇るのは、実は、本郷文学部に代表される専門主義に対する「語学教師」の引け目であって、自らが「二流専門家集団」でしかないという劣等感を糊塗するお題目として担ぎ出されたのが、大正教養主義的ディレックタントイスマの亡霊である、それにもかかわらず「文人」という「非専門家集団」まで「東大」の權威を傘に借り、「東大教授」面をするのは、事大主義であって、その志、いささか不純ではあるまいか、とするのが、大略、著者の論法の骨子とみてよからう。

この論法にすぐさま見いだされる短絡はふたつあるが、まず第一は、そもそも「専門家」ならざるものは「東大教授」としての資格に合致しないとす、いささか一方的な定義、ないし決め付けであろう。この点に着目すれば、著者の立論が一種の循環に陥っていることは明確である。逆に言えば、「ディレックタント」とは「喜ぶ人」であり、「アマチュア」とは「愛する人」であるという語源に遡って、教養学部独自の理念と存在価値とを擁護する立場が確認されるのであって、そうでなければ、教養学部における一般教育は、専門教育のただ単なる下請けとしての消極的な意義しか担い得ない。ここから演繹されるのが、いささか自嘲気味ないし嗜虐的な表現を敢えて使えば、むしろ役たたずの「文人」という珍獣が生息する人間動物園の内状を一生のうち、二年間ほどはつぶさに観察し、その中に入って模倣してみるのも、人生経

験として、即効の功德など何もないからこそむしろ有意義ではないか、という弁護である。

この「文人」の再評価と相関するのが、著者の第二の短絡であって、それは「権威」に関するものである。「文人」が「権威」にすぎり、「専門家集団」と同じ範疇で東大教授の肩書に執着するのは、文人の心意気に反するのではないか」、と著者はいぶかしがる。だが当の「文人」たちは、そのような「虚名」の権威、「ありもしない権威」にまつろう者として世間から見られるのに、そもそもうんざりしているのであって、むしろ許されるなら著者の提言する「駒場大学」ないし今は亡き「旧制一高」でよいと心秘かに思っているのは、実はこの「文人」たちではないか。そして、そんな「文人」たちと違って、自分こそ「専門家集団」に属するのだ、という選民意識から抜け出せない人種こそ、東大の「権威を僭称する」輩といわねばなるまい。「文人」即「非専門家」でおおいに結構だが、だから「東大教授」であってはならぬというのは、それが定義上の規定であるならともかく、権利問題としては論理に飛躍があろう。

＊

それでは何故「語学教師」は「東大教授」であってはならないのか。著者は、「文人」語学教師は「語学教育センター」にでも参加すればよろしく、また大学もそうした「入門レベルの専門教育」は、「若手の短期契約の教官・助手に大きく依存したほうが

有効」とする構想をしめているが、残念なことに、この発想には、以上の二重の混同に由来する、著者の語学教育に対する功利主義的・道具主義的価値観と、それに由来する「文人」不信とがあられもなく露呈しているように思われる。こと「入門レベル」の語学習得に、現在の大学設置基準が全く非現実的ではないのは事実である。いわゆるコミュニケーションの道具としての「有効」性を念頭にいれる場合、語学専門学校のような機関を別に設置するにしくはない。だが、「文人たちは、世を忍ぶ仮の姿として」、そのような「語学教育に携わ」ればよいとするのは、そもそも著者の立てた「文人」の定義に抵触する言動ではなからうか。そうした「センターは、実用語学教育に適当な人材を採用すべきだ」と著者は主張していて、それは正論なのだが、かかるセンターに最も不適切な人材こそ、ほかでもない、著者のいう「文人」に相当するはずだからである。

さらに、そのような機関では「短期契約の教官・助手」に「大きく依存した方が有効」とするのも、それだけならば、正論であろうけれども、そこには折原発言にみられた「非常勤講師ならよいが、助教授はだめ」（『朝日ジャーナル』四月二十九日号）と見る見解に一脈通じる、一種「権威」主義的な階層意識がほの見えてはいないだろうか。社会科学者までは科学者、つまりファッハマン＝専門家であるから大学構成員として妥当するが、語学教師など一般教育担当者は、かかる「大学」の正規構成員たる資格を

持ち合わせない、まして「文人」いわんや「文学者」においてをや。以上のような暗黙の前提を認めない限り、著者の論理は成り立つまい。

だが、もともと、著者はこうした専門主義の前提を突き崩すために、この論文を書いたのであったし、こうした大学観を批判するために駒場を去ったのである。だとすれば、これは不幸な誤解というほかない。「今日の文脈で教養主義がありうるとすれば、近代西欧との対決を含んだものでなければならぬ。しかし西欧の個々の国々の文化を愛する文人たちにとって、いまさら対決する意味はないだろうし」云々という著者の認識ほど、駒場の「文人」たちを悲しませる誤解はあるまい。「実用的語学」で事が足りれば、それこそ「西欧との対決」などなしで済ますこともできようが、不幸にして、事実がそうではないことを最も鋭敏に、それこそ身に刻み続ける傷として、日々の教場における無力感の内に否応無く経験しているのが、ほかならぬ語学教師という存在だからである。

教養学部¹の語学は役に立たない。だがもし役に立つ究極まで行ってしまえば、すべてはプロトコルに乗って自動的に運行し、もはや語学など役立てる必要もなくなるはずだ。役に立たぬからこそ議論があり、喧嘩が必要になる。翻訳が円滑に行くものだとする幻想をたたき壊すこと、翻訳によって伝達されていると素朴にも信じていたものだが、いかにまやかしにすぎなかったかを、実

地に体験し、自明と見えていた世界がいかに危うい虚構の上の皮膜でしかないかを、痛いほど思い知らされること。そうした実践を著者は「解釈学」と呼んでいるが、その特権的な現場が、一見非能率で、無意味な訳読の遅々とした作業、際限なく築いては崩す、決して完成へとは収束せず、むしろ無限の可能性へと発散していつてしまう、このほとんど無償のすりあわせの徒労のような訓練、決してなんらかの規範へと還元されることのない、この「主観と客観の交わりの場」にこそ存在するのではないか。

西欧、否、およそ他者なるものと遭遇して、それとの「愛」を実践するとは、否応無く、こうした「対決的教養主義」を要請される営みではないか。そこでは教養とは、隠された真理を開示することではない、真理の女神を裸にしてそれでよしとするのではない。むしろそれは真理と見えたものに裏切られ続ける賭ではないか。所詮自分のものには出来ぬことを承知で、逃げる女神を追いつづける、それは悪夢のような体験であるやもしれぬ。そして、それをしも、村上泰亮氏はあやまたず、「孤高の実験」と呼んだのではなかったか。

(一九八九年二月二十一日)



三井銀行

本店：〒100 千代田区有楽町 1-1-2

(JR有楽町駅、地下鉄日比谷駅下車)

TEL：501-1111(大代表)

501-1214(人事部直通)

昭和六十三年

第三十号

赤門合気道

編集 東京大学合気道部

発行 赤門合気道倶楽部

印刷 東京大学出版会教材部